



2

かんえいしょき こうじよ おもで 官営初期の工女の思い出

よこたえい めいじ ねん か かいそうろく とみおかにつき ほん
横田英が 1907(明治40)年に書いた回想録が、「富岡日記」という本になっており、当時の工女たちのいきいきとした様子を知ることができます。

とみおかせいしじょう とうちやく おどろ 富岡製糸場に到着したときの驚き

いちどうおく ひとびと つきそ
「一同送りの人々に付添われまして

とみおかせいしじょう ごもんぜん
富岡製糸場の御門前にまいりましたときは、
じつ ゆめ おも ほどおどろ
実際に夢かと思います程驚きました。

うま れんがづくり たてもの
生まれまして煉瓦造りの建物など、

にしきえぐらい み
まれに錦絵位で見るばかり、

もくぜん み
それを目前に見ますことありますから、無理もなき事かと存じます。」



富岡市イメージキャラクター
お富ちゃん

※展示ケース内「富岡日記」にて、実際の文章（写し）をご覧いただけます。

きしゆくしゃ ひ たま 寄宿舎に火の玉が！

よわたしども へや わだ かない かすが わたし
「ある夜私共の部屋の和田さん、金井さん、春日さん、私と
みなみ へや ひがし にかい べや あそ い
やはり南の部屋の東のはずれの二階部屋に遊びに行きました。

かえ よふ ろうか き
帰りは夜が更けまして、廊下のあかりも消えてしまい、

よにん こころ なか おも
四人ひとたまりに、こわいこわいと心の中で思っておりますと、
なか かいだん へや ひみ
中の階段のきわの部屋から火が見えました。

へや ながなが べや おどろ
その部屋は長々あき部屋でありましたから驚きましたが、

もう みなおそ ぞん むごん とお す
申したら皆恐ろしがるだろうと存じまして無言で通り過ぎまして、

つぎ かいだん おとき かすが
その次の階段を下りました時、春日さんが、

いま ひなん こえ もう
今の火は何でしょうとふるえ声で申されましたので、

いちどう もう ちゅうりやく めいめい み
一同きやっと申しました。（中略）銘々と見たところが違います。

わたし しょうじ み
私はやぶれ障子から見えました。

のち さんいん かいだん だん とお
後に三人は階段のすみ、またははしご段の通り、

よくあさそうそう しようじ
その翌朝早々まいってみると障子はやぶれておりません。

ただいま ふしぎ おも
これは只今でも不思議と思っております。

ほか こと もう ひと
その他いろいろな事を申す人がありますので、

じつ やぶんおそ こま
実際に夜分恐ろしくて困りました。」



参考図書／赤煉瓦物語（あさを社）

てとあるふじん 手を取りあって歩くブリュナと夫人

「ブリュナ氏の夫人は実に美しい人であります。

ふだん一日おき位にブリュナ氏と手を引きあって

繩場(※現在の繩糸所)の中を上から下まで歩みますのが例であります。

服装はいつも見事でありますが、

御巡幸当日(明治六年六月皇太后、皇后が

富岡製糸場を視察)の服には実に目を驚かせました。

あれが大礼服と申しますのか胸と腕とは出しまして

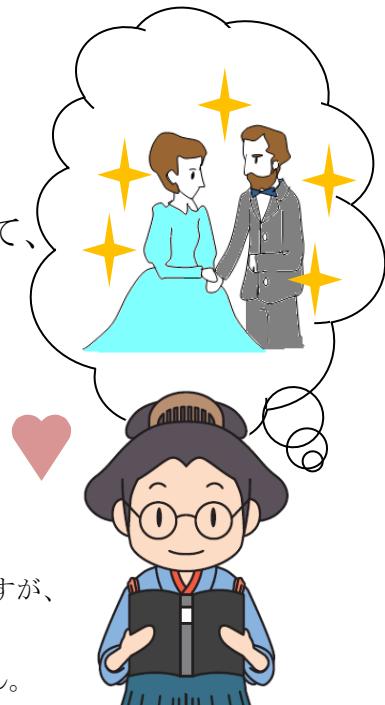
白のレイスのような品に桜の花のような模様があります、

その下にも同じような品で二枚重ね、

一番下に桃色の服を着しております。

その色が上まで透き通りますから

その美しい神々しい事たとえようがありません。……」



この思い出を和田(横田)英が書いたのは、富岡で体験した30年も後のことですが、

このように鮮やかに記憶しているのです。

装いも美しいブリュナ夫妻が、別世界の人間のように思えたに違いありません。

一等工女になったときの涙

「何と申しましても国元に製糸工場が建ちます事になっておりますから、

その目的なしにおける人々とは違います。

その中に一等工女になる人があると申し大評判でありまして、西洋人が

手帳をもって中廻りの書生や工女と色々話しておりますから

なかなか心配でなりません。

そのうちある夜、取締の鈴木さんへ呼び出されまして、

段々申し付けます。私共は實に心配で立ったり

座ったり致していますとその内に呼び出されました。

横田英一等工女申付け候事と申されました時は、

嬉しさがこみあげまして涙がこぼれました。……」

工女たちは、まず繭の選別を習得してから、

繩糸所で、西洋式の新技術の繩糸作業の習得に入りました。

一等工女の下に、二等、三等、等外工女とつづきます。

